

【虫笛……会員の声】

「博物館の昆虫と虫の話」

山内 智

〒030-0802 青森県青森市本町2丁目8-14 青森県立郷土館

事務局から、草笛の原稿依頼をいただき、勤務している博物館に展示されている「昆虫」と「虫」についての話を書くことにした。青森県立郷土館は、館名のとおり「明治百年を記念して、郷土を愛し、科学する心を養う教育機関」を目的に1973年9月に開館した、考古、自然、歴史、民俗、産業、先人、美術、教育等の各分野の博物館活動を行っている県立の総合博物館である。

全国の博物館・資料館には必ずと言っていいほど「昆虫」の展示がなされている。青森県立郷土館でも自然展示室には、世界遺産（自然遺産）「白神山地」のコーナーに当館が世界遺産指定前の10年間に渡って白神山地（周辺地域を含め）で行った自然総合調査で収集された昆虫等の資料が展示されている（図1）。ここには青森県レッドデータブックでは希少野生生物にランクされた白神山地周辺地区十二湖で採集されたオオゴキブリ、エゾゲンゴロウモドキ等も展示されている。この他に、季節に合わせて虫瘤の写真展示、牧場の糞虫等を展示している。

「昆虫」ではなく「虫」も展示されている。民俗展示室に展示されている「虫送り」の「虫」である（図2）。虫送りの風習は全国各地で昔から行われている。しかし、その内容は地方によって異なることが知られている。津軽地方の「虫送り」は毎年田植えが終わった後の農休日に、人形を先頭に太鼓や笛

などで囃し、村によっては荒馬や太刀振り、中には仮装した行列を伴い、村中を練り歩き、最後に村の出入り口の大木や、展示台に掛け（川に捨てたり、燃やすところもある）、稲につく害虫を村から追い出す、または村に災いが入らないようにする行事である。他の地方と大きく異なるのが、先陣を切る「虫」と呼ばれる人形である。全国的には圧倒的に人型人形が使われることが多いが、津軽地方では大蛇や龍の形をした「ムシ」と呼ばれる藁で作られた人形である（図2）。全体を藁で作られたものから、頭部を木で体を藁で使って作られたものまで、その形状は村ごとに異なり、一つとして同じものではなく、代々受け継がれたものである。いつ頃から始められたのか、はっきりしないが、江戸時代後期に東北や北海道を遊歴し紀行文を残している菅江真澄は1796年6～7月に津軽半島を旅し記した「外浜奇勝」の中に、虫送りの行事を記述している。古くから受け継がれてきた虫送りである。

青森の博物館には、自然の「昆虫」と一緒に民族的な風習の「虫」が、それも大蛇や龍のような虫が展示されている。

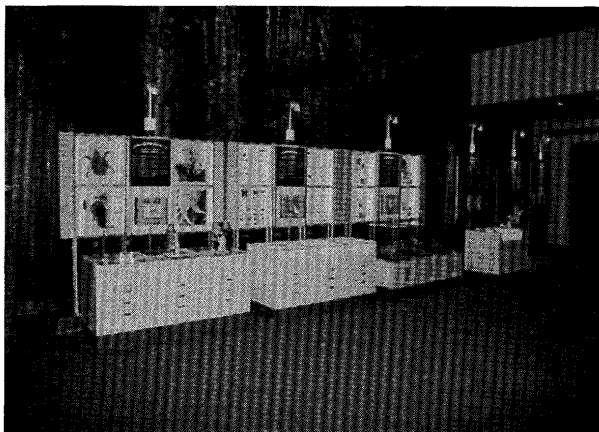


図1 白神山地コーナー展示風景

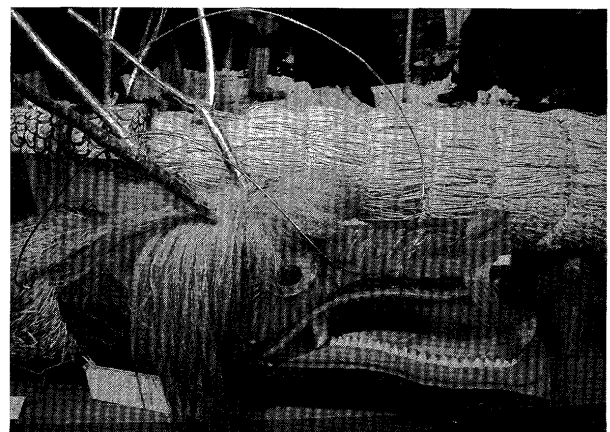


図2 津軽地方の「虫送り」人形の展示